

“月読命”とは何者か（2014年5月14日霊示） 担当:石田昭 2015年7月25日

- 1 月読命の力が強く感じられる。「何らかの働きが始まる」という気がする（総裁先生）
- 2 日本の食文化の基礎を作った。南方系の酒づくりを指導する保食神（うけもちのかみ）を排し、四足動物を食べないなど、日本をベジタリアンへと導いた。和食の祖
- 3 三貴神の真ん中の神として生まれた女神。姉の天照は文化、産業（第二次産業）を担当、弟の須佐之男は武力、国家の基礎体力、月読は食、農業（第一次産業）を担当した。
- 4 私は「レプタリアン系」の「竜族・ドラゴン族」の食人思想を日本では禁じた。須佐之男のヤマタノオロチ退治は「レプタリアン族」の最後の退治、消滅を意味する。
- 5 勢力拡大のため、九州に配された。姉の天照は近畿・大和方面に進出する中心の勢力。須佐之男は九州よりさらに先の五島列島、朝鮮半島に新天地を求めた。
- 6 倭姫（天照の転生）が、若狭湾の食文化、豊受の大神（伊勢神宮外宮）を重用されて統一されたときに、月読命の名前は急速に衰えていった。月読の食習慣は九州に残っている。
- 7 月読命の名前が消えた理由は「月中心と太陽中心の思想戦」があり、太陽を背にして勝利した神武の即位が意味する「太陽信仰の勝利」があったから。月読は先進地が近畿に移っていく中で、衰退していく九州を守る側に立った。自己主張しない無我・無私で滅私する月読
- 8 きょうだい喧嘩したわけじゃないが、「月の信仰」が「迫害された」。一つの信仰を固めたときに、他のものは脇役でよく、別宮でいいという考え、本当は月読宮が「破壊された」。
- 9 赤道直下であれば、「太陽が女性」という事は無い。日本が温帯化したとき（地軸の変化で）に、太陽神は女性になった。エジプト、ギリシャも地軸の変化で気候が地中海気候に変化した
- 10 伊邪那岐が左目を洗うと、天照が生まれ、右目を洗うと月読が生まれたとあるが、本当は逆になったんです（？）左（男）が上、右が下になった。「記紀作成時に敗れし神になった」？
- 11 アルテミスとは同一人物です。ゼウスの子だが、当事はアポロンとは夫婦（コロニスの後妻か？）。
- 12 現代に生まれ、幸福の科学に急接近中。最近、働きが強くなってきた。プロテクター役
- 13 陰陽師のいた時代、陰陽師をさらに指導する立場にあった。陰陽五行思想を取り入れ、研究したのは聖徳太子。アルテミスの霊言では北条政子の「平家の亡霊封印」を「神様」の立場で指導した、「平家の武者がハデス化」していたので紫央様の働きが無ければ「鎌倉幕府」は不可能だった。

**参考：** 総裁先生の言葉より： 古代文献を読むと、持統天皇の前までは月読宮がたくさんあった。

**アルテミスの霊言より：** 月読の魂は持統天皇のころ、持統即位に反対する側に立つ人として出た。持統天皇は天照を尊崇し、天照信仰を立てた、その後伊勢神宮が発展し、それまでたくさんあった月読宮が急速に無くなっていった。天照様が悪いわけではないが、月読が干されて、追い出されていった象徴が「かぐや姫」の話。太陽と月と本当は両方とも必要。ボカした所と、明かさない所（男性霊）あり。

**須佐之男の霊言より：** 天照様を持ち上げたということは、「日本書紀」、「古事記」をつくったころに。女性の実力者が歴史上存在したことを意味している。「女性天皇を称えさせるために、かつての神々のなかの女性を、非常に高く祀った」と言う事が政治的にあった。記紀の作成は天武・持統の時期

**神産巢日神の霊言より：** 後に伊邪那美の神、天照大神も女性として出てくるのですが、肉体先祖・子孫的には私の方が地上においては先んじているものである。

記紀神話においては宇宙の三神(造化の三神?)に先立って伊邪那岐・伊邪那美が国づくりをしたと取れる書き方がしてある。時間確定ができないこともあり、何らかの不利益な取り扱いを受けている。

神産巢日神と月読命の扱いとが極めてよく似ている。アルテミスの霊言では女性としての転生しか語っていないようで、男性神としても相当多く出ている様子。普通の転生とは違い、魂が多角化している。